

EDUCATION

生理学研究所におけるアウトリーチ活動

生理学研究所 山中 章弘

近年は研究者に対して「アウトリーチ活動」なるものが求められている。初めてアウトリーチ活動という言葉聞いたときに、恥ずかしながら意味がよく分からなかった。麻雀の用語かと思った。実はいまでもよく分かっていないかもしれない。そこで早速 Wikipedia で調べると「科学技術分野におけるアウトリーチ活動とは、研究者や研究機関が研究成果を国民に周知する活動を指す」とある。さらに国際会議や国際シンポジウム等を開いて、広く一般に成果を発表する場合、または、研究論文や学会誌として投稿することもアウトリーチ活動の一環であるらしい。それなら研究者はこれまでずっとやって来ている(はずだ)。しかし、「最近のアウトリーチ活動」という言葉が意味するものはそれだけにとどまらず、専門家以外を対象とした研究発表会、講演会、研究施設の一般公開などを指すものと思われる。ここでは私が所属する生理学研究所(生理研)における「最近のアウトリーチ活動への取り組み」についてほんの少しだけ説明する。

生理研におけるアウトリーチ活動は、すべて広報展開推進室を中心に行われている。広報展開推進室といってもただの事務室ではない。医師であり最先端の網膜研究者でもある小泉周准教授を中心として、生理研発の情報国内や国外に向けて常時発信する窓口である。その活動は多岐に渡っている。平成22年度の一年間だけで、せいらけん市民講座等主催講演会4回、施設見学受け入れ30回、講師派遣等25回、新聞報道等プレスリリースの取りまとめ161回に及ぶ。せいらけん市民講座とは、単なる講演会ではない。医学生理学や脳科学の最新の研究結果と、その知識の応用について

生理研が講師を派遣し、岡崎市保健所とのタイアップによって、より市民の立場に立った実践的な講座である。時にはスーパーサイエンスハイスクールとのコラボもあったりする。観客の中にはリピーターも多く、子供からお年寄りまでの幅広い年齢層が参加し毎回100人程度集まっている。私自身も昨年度に、せいらけん市民講座「睡眠を科学する～脳波と睡眠の不思議な関係～」を行い大変お世話になった。その時の経験からアウトリーチ活動について感じたことをほんの少しだけ記載してみたい。研究者という職業は研究が生業であり、少なからずごく普通の人がやらない(やれない)仕事を得意として行っている人種である。もちろん博識で能力が高いことが期待されているのだが、優秀な研究者が全員アウトリーチ活動においても同じく優秀であるわけではない。一方で、研究結果・成果を周知されるべき一般国民の側はどうだろうか?全く科学に興味がないわけではないが難しいことはよく分からないし、難しいことなら聞きたくないというのが大半ではないだろうか?この二つを無理矢理引き合わせると、時として不幸な事態を招くことがある。つまり科学や研究者に対する不信や誤解が生じ、実際やらない方がマシだった、などという本末転倒なことにもなりかねない。自分がやってみてはじめて気が付いたのだが、自分が普段何気なく使用している単語、研究室では通用する単語が通じないのは当然として、気を遣って言い直した言葉や語句の説明すら通じなかったりする。もはや使用言語が違うといっても良いかもしれない。とにかく使用する語句には相当気をつけなければならない。元来、最先端の研究と一般国民の理解というものは、水と

油のように互いに簡単には受け入れられないのかもしれない。しかし、そこに界面活性剤のような仲介があると混じり合うことが出来る。ここで言う界面活性剤とは研究者の言葉を簡単に分かりやすい言葉にして説明するインタープリターのような存在である。確かにアウトリーチ活動は重要であり、研究費使用の対価として研究者にそれを求めるのは当然なことであり、研究者の義務であるかもしれない。しかし、研究者個人にアウトリーチ活動を求めるだけで決して事が運ぶわけではなく、そこには会場運営、宣伝などの準備だけでなく使用言語の事前調整や解説などの仲介があって初めて本来のアウトリーチ活動の目的を達成できるのではないだろうか？生理研では広報展開室が活躍しているが、日本全国の大学・研究所でこのようなシステムを有している訳では無いと思う。このアウトリーチ活動をサポートするシステムが重要であるにも関わらず、日本ではこの重要性が十分認識されているとは言い難い。

話は少し変わるが、先の東日本大震災とそれに伴う原発事故の国民および海外への説明・情報発信の有様は、日本における研究者（科学者）と一般国民を橋渡しするインタープリターの不足と情報提供のノウハウの不足を再認識させるのに十分であった。国民が求めている情報と発信される情報との乖離、説明に使われる専門用語・聞き慣れない単位などが飛び交った結果、不安を煽り、デマや買い占めなどの過剰反応に繋がった可能性は

ないだろうか？そこに、本来分かりやすく科学を伝える窓口となるべき日本の各メディアの知識不足と人材不足が加わるともはや致命的である。今回の原発事故の対応で研究者（科学者）と一般国民との信頼関係は大きく揺らいだ。研究者のキャリアパスの一つとしてインタープリターの育成や各メディアへの人材輩出に真剣に取り組む必要があるように感じる。研究者と一般国民との信頼関係は一朝一夕に作られるものではない。せいりけん市民講座のような地元に根付いた継続的な活動を通じて日頃から科学・研究に興味を持って貰い、地道に信頼関係を築き上げることこそが最近のアウトリーチ活動に求められているのかもしれない。

岡崎3機関（生理学研究所、基礎生物学研究所、分子科学研究所）は毎年交互に一般公開を行っており、各研究所は3年に1回一般来場者を迎える。丁度今年は生理学研究所が担当の年に当たり、11月5日（土）に生理研一般公開が開催される予定である。各研究部門が競って魅力的な展示を行うために、毎回評判が良く、今回もその準備にむけた取り組みが既に始まっている（5月の時点）。各方面から多数の見学者に来て頂き、最新の研究に触れると同時に信頼関係を築くための有意義な楽しい1日となることを願っている。最後にこの日本生理学雑誌の教育委員会のページを読んで下さった生理学の専門家の皆様も是非ともご来場頂き叱咤激励頂ければ幸甚です。

「教育のページ」は学部学生、大学院生、ポスドク、教員などを対象に、生理学教育に関する取り組みや意見を紹介することを目的としています。原稿はWeb（日本生理学会ホームページ）上にも掲載されます。皆様のご投稿をお待ちしています。投稿規程は<http://physiology.jp/exec/page/kyoiku-page-kitei/>をご参照ください。

原稿送付先：日本生理学会編集・広報委員会（psj@qa2.so-net.ne.jp）